教 区 報

第116号　2021年12月

日本ハリストス正教会教団
東日本主教々区

発行：東日本主教々区宗務局
〒980-0021　仙台市青葉区中央３丁目４番20号
電話　022-225-2744　fax　022-224-3080　　http://www.orthodox-sendai.com/
振替　02200-2-30428「東日本主教々区宗務局」　orthodox@hyper.ocn.ne.jp

主・神・我等の救世主
イイスス・ハリストスの降誕祭

生神女マリヤの胎に主は宿り、降誕された。洗礼を受けた者は聖神の働きによって神の子と呼ばれ、主の降誕に因って、私達は神・子の似姿に変えられ、神・父を見るまでに引き上げられていく。人の洗礼はハリストスの降誕にあたるともいえる。このことから、洗礼を受けた者がその信仰を深め、高めることによってその人のなかで、神・言葉は絶えず新たにされ、成長していくのである。それは少年の背丈が伸び、成長し、成熟していく姿とかさなる。神の光栄は、人間であるという言葉が伝えられている。神の似姿に創造された人間は、神の子として完成されていくという、人間観である。生神女マリヤの胎に宿った主は人の子として誕生されたように、洗礼は教会を母マリヤの胎とした、主の降誕になぞらえられる。

主は家畜小屋を選び降誕され、更に飼い葉桶に身を委ねたように、私達の汚れた器に身を委ねられた。ならばこの体の中に、この命のなかに飼い葉桶を備え、降誕の時を共に迎えようではないか。

人の喜びは神の恩恵がやってくるので湧き出すというよりは、神を自分のなかに納めること。生命で受け取り、闇夜のような己の魂の一番深いところに、主の降誕を求めなければならない。その喜びは自分だけにあるのではなく、隣人等との親しみ、そして愛がなければ降誕の喜びは生まれないのである。

令和三年度 教区会議と全国公会の開催

教区会議　6/26-27　仙台

6月26日(土)と27日(日)、仙台正教会において教区会議が開催された。昨年同様、コロナ禍の影響で最小限の人数を集めて行われた。26日は午後に宗務局理事会が行われ、主日奉事の後、27日午後から教区会議が始められた。

セラフィム大主教座下のご訓示に始まり、業務報告、決算、次年度計画、予算について特に質問もなく承認されたが、宣教献金の募集状況については目標額を下回ったこともあり、底上げを図ることが確認された。また老朽化した仙台の信徒会館について、東日本の教区センターとしての重要性を鑑みて、教区としてもリニューアルについて、財政を含めて積極的に検討して行ってもらいたいと大主教座下からお話があった。

また、コロナ感染による影響を鑑みて昨年同様交付される特別交付金の配分について、9月2日(木)に仙台で宗務局会議が開かれて決められた。

全国公会　7/10-11　東京

長司祭ワシリイ加藤神父様ご永眠

休職されていたワシリイ加藤國枝神父様(88歳)が、6月25日㈮に膵臓癌のためにご永眠され、6月30日㈬にセラフィム大主教座下ご司祷のもと仙台正教会にて埋葬式が執り行われた。

加藤神父様は昭和47年輔祭叙聖、平成8年司祭叙聖、平成28年に長司祭に昇叙されて、昨年1月に休職された。戦後仙台の青年会発足時から率先して教会教区の諸活動に奉仕され、約50年にわたる神品職を全うされた。

1年半の闘病生活だったが、ご自宅でマリヤ勢津マートシカと静かに過ごされ、5月に急逝されたマリヤ姉の後を追うようご永眠された。ワシリイ神父様の大いなる功績に敬意を表すると共に永遠の記憶を献じます。

▲ニコライ会館で行われた公会本会議

▲長輔祭に昇叙されたニコライ松田師

7月10日㈯、11日㈰に東京ニコライ堂において今年度の全国公会が開催された。昨年同様多くの代議員が欠席委任となった。

初日に宗務総局から一年の活動の振り返りを、また全国宣教企画、財務諮問、諸規則検討の三委員会からは刊行物発刊や財務関係の統一された指標作成、教団憲法の改正作業などが詳細に報告された。

二日目は収支決算報告、予算審議が行われ承認された。その他、宗務総局からは自給神品の服務規定を制定したこと、また二〇〇八年に重要文化財に指定された豊橋正教会の全面補修工事、山手正教会の新聖堂建設計画が報告された。人事では横浜正教会の管轄を小田原のディミトリイ田中神父が兼務し、本会のガブリイル田中神父が補助司祭となることが発表された。また、本公会聖体礼儀中、大阪正教会のニコライ松田光剛輔祭が長輔祭に昇叙された。

セラフィム大主教座下のご動静

セラフィム大主教座下は、基本的に月２回の主日聖体礼儀を東京復活大聖堂（ニコライ堂）においてご司祷され、また様々な会合への出席や教団全体への配慮を継続なさっている。新型コロナウイルスの影響が危ぶまれた時期にはニコライ堂は参祷自粛となったが、緊急事態宣言等が解かれた後は、一般信徒の参祷もゆるされている。

▲　9/12　ダニイル府主教座下の聖名祭に、モスクワの大公聖ダニイルの転達を祈るモレーベンが行われ、セラフィム大主教座下より祝辞が述べられた。

▲　10/12　ロシア大使館を訪問され、オヴェチコ・ゲンナーディー臨時大使とロシア主教会議や日ロ正教会交流関連の意見交換を行った。

▲　9/12　東京復活大聖堂教会のガウリイル横山誠也兄がセラフィム大主教座下によって副輔祭に祝福された。

▲　8/19　主の変容祭に果物の成聖

▲　10月より参祷自粛が解かれたニコライ堂で久しぶりの信徒領聖

函館ハリストス正教会（主の復活聖堂）
聖堂耐震化及び保存修理工事

函館ハリストス正教会の聖堂保存修理工事は予定通り進み、現在は鐘楼・聖所のクーポル上部まで聖堂全体に足場が組まれている。足場は強風対策の為に三重の構造にしてワイヤーと支柱で支えられ、さらに周囲は鋼板で覆われた。

すでに聖堂耐震化の工事は完了し、鐘楼直下に新しい基礎を作り、屋根から補強材のアラミドロッドを壁面に埋設して基礎に連結された。また、鐘楼天井周囲を鉄骨で補強した。聖堂の内部もイコンや壁の漆喰の補修、窓枠などの塗装のために足場が設けられている。本格的なイコンの修復は来年夏から3か月かけて境内地の作業小屋で行われる予定である。

▲鐘楼直下の基礎工事

▲鐘楼天井周囲を鉄骨で補強

▲新たに正門も耐震化

▲屋根の葺き替え工事が進行中

屋根は緑青で覆われ聖堂の特徴の一つになっている。今回の工事では緑青を化学的に発生させた加工銅板を使用するが、経年でどのように発色するか、少々不安である。クーポルも銅板を張替え、塗装する。

工事の進行に伴って、いくつかの変更点も出ている。特に正門の耐震化が新たに提案され、今後耐震診断に基づいて工事計画が策定される。また、工事終了時期については、当初来年十一月末の聖堂本体工事の竣工とされていたが、二〇二三年一月中旬に延期され、同年春に境内の回復工事が行われる予定である。

聖体礼儀の始まり。正面の天門が開けられ、司祭は宝座の上に置かれた金装の福音書を両手にして握り、立てたまま上下、左右に動かしながら『父と子と聖神の国は崇め讃められる、今もいつも世々に』という神を讃揚する言葉を大きな声にのせます。この神聖な言葉は聖体礼儀と結び付いていた、洗礼式や婚配式なども同様の言葉から始まります。神を讃揚して始めるのは創造主、全能者である神の光栄を表すための儀式であることが示されています。

私たちの生活のすべても、やはり神の光栄にあって行われます。例えば自分や家族の健康や利益の為に祈る時にも、やはり神に光栄を帰して祈祷は始められます。私達が神を讃揚し神に光栄を帰して総ての祈りが行われるのは、神の祝福と助け、成聖を賜わる為です。『父と子と聖神の国は一』を聞きながら頭を下げ、十字を描くとき、この言葉と外儀によって私達の命は輝き、生活の日々は新たにされてゆくのです。日常生活に於ける衣食住。貧しい中身であっても神の祝福に因って成聖され、真の豊かな生活へと変えられてゆきます。

神による創造の全ては、神の光栄の為に造られています。聖体礼儀に於ける最初の聖歌（百二聖詠）、晩課の始まりに歌う聖歌（百三聖詠）では、神の創造を崇め讃美しています。有りとあらゆる万物は皆、神の御旨によりその光栄の為に造られました。天地の諸々の生きもの、言葉を持たない花も木も草も、山も海も総ての造物は神は全能なり、叡智なりと、存在そのもので神の光栄を現しているのです。神は愛によって、人を神の像と肖に従って造られただけでなく、神父の愛は独り子を遣わして、十字架・復活そして昇天、父の右に座している事を知らしめ、更に聖神を遣わして人々に共動し、神を知る時と力を与え、人を神の本性にあずかるものとされたのです。

一方パニヒダなど諸祈祷を開始するときは『我らの神は常に崇め讃められる一』となり、「父と子と聖神の一」の部分は「神」となっています。祈祷の中で単に神、あるいは主、と呼ぶときも常に至聖三者である神に向けられ、神・父は全愛に因って私達に向かい、神・子は私達の為に中保し、聖神は私達と共に働くことを信ずるのです。また神の国とは私達と神との交わりにある永遠の生命であり、永遠の生命とは神・父と神・子、神・聖神との交わりに預かる生命ということです。祈祷に立ち、「父と子と聖神の国は一」の言葉を聞くときは心を引締め、自分の終着と、新たな出発にいることを念じて一心に神の国に歩まんとする覚悟を憶え、救いの流れにいる自分を確かめる祈りの時としましょう。

『父と子と聖神の国は崇め讃められる』

長司祭 マルコ 小池祐幸

北海道ブロック宣教会議

8月28日㈯、29日㈰の両日にわたり、今年度の第一回宣教会議が、初めて会議アプリを利用して、函館・札幌・釧路・仙台を結んでテレビ会議を行った。道内の全管轄司祭、全宣教委員、釧路と仙台から聖歌研修会講師の二人（オブザーバー）が参加し、復活祭以後の主だった教会活動の報告、今年度予定されている諸行事の打ち合わせ、今後の宣教会議の在り方について話し合った。次回11月の会議までに具体的な宣教アイデアを各自提案することも申し合わせ、久しぶりに実り多い話し合いができた。

リモートでの開催は初の試みだが、対面と変わらぬ有効性を確認できた。これからも実施する予定である。

▲4か所をつないで行われたZoomによる宣教会議

東北ブロック宣教会議

10月21日㈭、令和三年度第一回目となる東日本主教教区の東北ブロック宣教委員会が、一関正教会において開催された。

開会に先立って長司祭ワシリイ加藤神父様を記憶するリティヤを行った。会議ではコロナ禍の中での各教会の状況報告がなされ、教会毎にそれぞれ工夫して対処を行っていることを確認しあった。その後、東北ブロックにおける今後の行事開催の予定について話し合った。また、教区出版物として、いくつかの提案がなされ、発刊にむけて準備することとなった。最後に、教区報や播かれた種の発行日や内容について話し合われた。

北海道ブロック 聖歌リーダー研修会

11月3日㈬、函館正教会において聖歌リーダー研修会が開催された。皆が集まっての対面による研修は久しぶりで、コロナの感染状況も多少落ち着き、参加人数も少ないことから実施に踏み切った。

講師であるエカテリナ児玉姉、エレナ笠原姉の周到な準備により、事前アンケートを基にして、現在の活動状況や課題、奉仕の中で何を大事にしているか、また今後の聖歌研修会で取り上げて欲しいことなどについて話し合いを深めることができた。後藤神父による聖歌の解説も大いに勉強となった。一回の会合で聖歌研修のこれからの方向性を打ち出すことはもとより期待していなかったが、聖歌隊員の力量に応じながら、意欲的な活動に取り組もうという確認が出来たのは良かった。奉仕者一人一人の悩みや要望に耳を傾けながら、より実りある研修にして行くために、これからもリーダー研修会を継続していく。

▲久しぶりの対面による研修会

▲エフレム後藤神父のヘルヴィムの歌の講義

文化講演会 【北鹿正教会】

毎年11月3日の文化の日に合わせ行われている「文化講演会」が今年も北鹿教会にて行われた。秋田県内ではコロナの感染状況もある程度落ち着き、その影響もあってか今年は昨年を大きく上回る来場者があった。講演会は教会周辺地域の一般の方々を対象としており、地域の文化財となっている北鹿教会の生神女福音会堂を通じて宣教を行うという催し。

今年は山下りんのロシア留学とその苦悩を掘り下げ、当時のロシアイコンをめぐる状況、正教会にとってのイコンの意義、りんがイコンを描き続けたことと正教会の信仰の関わりについてなどをテーマに講演を行った。講演会の前には20分ほどの感謝祈祷が行われ、りんのイコンが単なる芸術作品として展示されているのではなく、実際の信仰の現場において、大切な祈祷の道具として今も用いられている様子が示された。

中新田正教会「共葬墓地」

この度、中新田正教会の教会墓地の一角に、ステンレス製の八端十字架を頂く「中新田正教会共葬墓地」が設置され、8月29日㈰に成聖された。予ねてからの懸案であったが、これからのお墓の問題解消に大いに役立つことだろう。

墓地は焼骨を骨壺に入れたまま安置する形がとられた。共葬墓地使用規定と細則も取り決められ、すべて永代契約とし、中新田教会所属の信徒だけでなく、日本正教会の信徒であれば誰でも使用できる。

釧路正教会「納骨堂」

釧路教会では、釧路市紫雲台にある市営墓地内に納骨堂を建立し、10月15日に成聖式を行った。二〇一七年、ある信徒が自家墓所の縮小整備を行ったことで空いた場所を、釧路教会墓地として使用する権利を得て、話し合いを重ねた結果、営利目的ではなく信徒の永代供養を目的とし、教会自身が管理運営をしていく納骨堂を建設することとなった。

納骨堂の外観上の特徴は、正面左右に設置したハリストスと生神女のモザイクイコンである。内部奥にもハリストスの復活のイコンが掲げられた。これらは山田正教会の外壁に設置されたモザイクイコンと同じ工房で製作された。納骨堂内の左右壁際に設置された石板棚に、百六十体分ほどの骨箱を置くことができる。

盛岡正教会「聖堂ライトアップ」

盛岡正教会の信徒であるゲオルギイ森谷耕太郎兄の篤志で、昨年から計画が進められてきた聖堂ライトアップが今夏に完成し、夕方から夜九時頃にかけて聖堂を美しく照らしている。聖堂は丘の中腹に建てられており、下を走る国道4号線からもよく見える。聖堂が明るく照らされて教会の存在がより広く認知され、今後の宣教に繋がることを期待したい。

10月23日㈯の主日前晩祷後には「聖堂ライトアップ見学会」として完成お披露目を行った。インターネットで聖堂公開を含めたイベントを告知したところ、予想を上回る数の見学者が教会を訪れた。想像以上に教会に関心を持ってくれている人が多いようである。これを今後の活動計画の弾みとして、引き続き宣教に力を入れていきたい。

食前の祈りについて

長司祭ダヴィド水口優明

天主経

私たち正教徒にとって、食事をする前に祈ることは非常に大切です。食前の祈りとして第一にあげられるのが「天にいます」で始まる「天主経」です。「天主経」の中に次のような祈りがあるためです。

「我が日用の糧を、今日、我等に与え給え」

「日用」とは「その日のための」という意味で、一日一日、自分に足りる分だけの糧を神様に願います。「有り余るほどに」「ずっとこれからも」と祈るのではないことに注意しましょう。この祈りの基礎には、神様の摂理によって、今日、糧が与えられることを信じる信仰が必要です。今日の食事は、私が働いたお金で私が手に入れたもの、という高慢な感覚を「食前の祈り」は殺してくれます。

「糧」とは、文字通りには「パン」という意味ですが、食事一般を指しています。そしてそれは、「肉体的な糧」と共に「精神的な糧」をも意味しています。私たちは、体と心の両面が一つになっている存在だからです。

御聖体

「日用の」と訳されたギリシャ語は「エピウーシオス」といい、別の意味として「本質の上をいく」「自然を越えた」というニュアンスもあります。この点から聖師父たちは、この「エピウーシオスの糧」とは、天のパンであるハリストスご自身、つまり御聖体を意味していると解釈します。

聖体礼儀の中で、領聖の前に「天主経」を唱えるのは、ハリストスの尊体尊血を食すための心の準備なのです。領聖は、神様と私たちの交わりと一致をもたらす恵みを与えます。逆に言えば、普段の食事の前に「天主経」を祈ることによって、その食事も「神との交わり」を与えるものになっていくということです。

もう一つの「食前の祈り」

「小祈祷書」には、もう一つ、食前の祈りとして次の短い祈りもあります。

「主よ、衆人の目は爾を望む
爾は時に従いて彼等に糧を賜う
爾の豊かなる手を開きて、
諸々の生ける者を爾の恵みに飽かしむ」

これは、第百四十四聖詠（詩編１４５）から抜粋された言葉です。つまり旧約聖書の言葉を、今も「生きた言葉」として日々使用しているのです。今から約三千年前もの昔にダヴィド王が祈った祈りです。その頃、日本はまだ縄文時代でした。世界各地に紀元前の古い遺跡や遺物が存在しますが、それらは皆、いわば「死んだもの」です。しかし、聖書の言葉は「生きて」います。聖書の言葉を元にしている正教会の祈りの言葉を口に出す時、それらは時空を超えて今、自分の唇の上にあることにも思いを馳せてみましょう。

言葉の意味

この食前の祈りは、短いながらも深い意

味を持っていますので、天主経の代わりにこの「主よ、衆人の目は」をお祈りすることもお勧めします。以下に言葉の意味を簡単に説明します。

「主よ」：神様に対して「主よ」と呼びかけるのは聖書時代からの伝統。自分たちは神様のしもべであるという認識をもたらす。

「衆人の目は爾を望む」：「すべての人」「すべての被造物」は、神様に心の目を注いでいる。「望む」とは、「待っている」「期待している」「信頼している」という意味。すべてを創造した神様に心を向ける。しかし、人間だけが、神様の方に目を向けないで、自分のことばかりに向けているのでは？

「時に従いて」：この「時」は、ギリシャ語で「エウケリア」といい「善い時」「ふさわしい機会」という意味。神様が愛と善をもって万物を「摂理」なさっているということ。

「彼等に糧を賜う」：「糧」のヘブライ語は「レヘム」で「パン」、ギリシャ語は「トロフィン」で「食物」「養分」という意味。食べ物を与えて生命を支えているのは神様。金口イオアンは「実に果実を生じさせるのは雨でも地でも空気でもなく、天地創造の時の神の命令である」と教えている。

「爾の豊かなる手を開きて」：「手を開く」とは、聖書の中では「心を開いて受け入れる」「憐れみを施す」という意味をもつ（申命記15：8、15：11などを参照）。「神の開かれた手」という言葉は、神様の大いなる愛をイメージさせる。

「諸々の生ける者を」：生命あるすべてのものを。存在するものすべてを。

「爾の恵みに飽かしむ」：「恵み」のヘブライ語「ラツォン」も、ギリシャ語「エウドキア」も、「善き意志」という意味で、聖書では「神に喜ばれること」「神の旨にかなうこと」を意味する。つまり感謝して食事することは、「神に喜ばれる」という喜びをもたらす。「飽かしむ」は「満たす」「満足させる」という意味。

食前の祈りの大切さ

聖書では「絶えず祈る」ことが教えられていますが、しかし現実的にそれが難しい私たちであっても、「時に従って」祈ることはできます。この「時」を、食前としておけば、「祈る時」を逃すことはないと言えます。なぜなら、人は必ず食事をする時間が必要だからです。

「いのち」は、食物によっています。その「いのち」という「恵み」を今日も与えてくださっているのは神様であるという信仰を確認し、深め、感謝と讃美をささげることが、本来の人間の姿なのです。その姿を「食前の祈り」は構築してくれます。そして、神ハリストスと交わる聖体機密こそが私たちの本当の「いのち」を支える食事であるという確信へ導いてくれます。

コロナ禍の中で

世界に吹き荒れている「コロナ禍」という嵐の中で、教会に参祷することが困難な時代が続いています。教会に来て祈れない分、家庭で祈ることが奨励されます。もちろんイコンの前に立って時間をかけて祈祷することも大事ですが、毎日、「食前の祈り」を心を込めて祈り、神様に心を向けることの重要さも改めて認識して欲しいと思います。

すべてを摂理なさっている神様に心を向けて、神への讃美と感謝と畏怖をもち、食事を通して神様との交わりが出来ることを喜びましょう。

ー　宣教献金の御礼とお願い　ー

＋主の御名によりてご平安をお祈りいたします
皆様方のご理解とご協力を賜り、昨年度は381件1,936,000円の宣教献金が寄せられ、わずかに目標額に届きませんでしたがご協力に感謝申し上げます。
今年も年末が近づき来年に向けて教区の宣教献金募集の時期になりました。
下記の要領で募集いたしますので、ご協力をお願い申し上げます。

記

■２０２１年度宣教献金目標額　　２００万円
■献金額　　1口　　３，０００円（1口以上を目安にお願いいたします）
■献金方法　　同封の郵便振替用紙に住所、所属教会名、聖名、氏名を記入しこれまで通り、最寄りの郵便局(ゆうちょ銀行)にてお手続き下さい。
■期　　間　　２０２１年１２月７日　～　２０２２年５月３１日

人物消息

ー敬称略ー

（２０２１年５月～２０２１年11月）

◆洗礼［教会名・聖名・氏名・受洗日］

釧路　オリガ　田中サダ子　7月18日
札幌　セラフィム清水飛伽　11月12日
盛岡　アレクサンドル渋谷久徳　6月20日
　　フォティナ竹田理佐　6月20日
山田　パウェル　中野實　11月2日
中新田　ハリスティナ板垣　楓　9月26日
　　マクリナ　板垣吏莉　9月26日
　　ハリトン　板垣　樹　9月26日
　　エリザベタ渡邊莉子　9月26日
　　アンナ　高橋シギ子　11月27日

※洗礼おめでとうございます。

◆永眠［教会名・聖名・氏名・永眠日］

釧路　マリヤ　川上イネ　5月2日
　　ステファン岩崎　寛　5月2日
斜里　アニシヤ　佐藤きわ　9月12日
上武佐　エラスト　小森　堯　9月13日
札幌　モイセイ　田中　稔　5月21日
　　イグナティ水嶋哲也　5月22日

小樽　ニキタ　田中千千穂　9月26日
函館　アンブロシイ花野英昭　5月3日
　　イリヤ　吉川征悦　6月5日
上磯　イリナ　田中利代子　8月26日
遠野　マカリイ　荒川京一　4月11日
　　ミハイル　荒川富美男　5月10日
北鹿　マリヤ　川瀬セキ　7月31日
盛岡　アナスタシア湊　芳枝　11月10日
十文字　プロクル　佐藤英光　6月9日
盛　カッシアン菊池　隆　8月21日
盛　エルミイ　伊勢重徳　10月3日
仙台　マリヤ　加藤勢津　5月27日
　　長司祭ワシリイ　加藤國枝　6月25日
　　アンナ　菊池　道　9月9日
　　テイモフェイ遊佐咲郎　10月23日
中新田　ニコライ　西村仁美　8月10日
白河　ユリヤ　小木原昭子　5月13日
　　イリナ　堀田キヨ　10月31日

※永遠の記憶をお祈りいたします。